

# 杜甫「江南逢李龜年」の唐代における流傳について

長谷部 剛

## (一) 前言

岐王宅裏尋常見

崔九堂前幾度聞

正是江南好風景

落花時節又逢君

岐王のお屋敷でいつもあなたをお見かけし、

崔九の大廣間の前ではあなたの歌を何度も聞いたものだ。

いままさしく、ここ江南はすばらしい風景の地。

この地で、しかも花の散りゆく時節に、あなたにもう一度お会いするとは。

杜甫の七言絶句「江南逢李龜年」〔清〕錢謙益「箋注」『杜工

部集<sup>(1)</sup>」卷十七所收)は、彼が没する年、大曆五年(七七〇)の晩春、潭州(現在の湖南省長沙)での作とされる。華やかかりし開元年間、まだ少年であった杜甫は、皇族や貴顯の邸宅で玄宗の寵愛も厚かった名歌手、李龜年の歌唱を耳にした。その後、安祿山の亂勃發を契機として南方を流寓することになった杜甫は、同じく流寓の身であった李龜年と潭州の地で再會する。遙か南方の地で約四十年の時を隔て再會した奇遇もさることながら、七言絶句という短小な詩型で杜甫の生涯を凝縮し得ている點で、「江南逢李龜年」は杜甫の傳記論や杜詩の選集には必ずと言っていいほど採録・言及されており、廣く人口に膾炙している。

ところが、「江南逢李龜年」は、右に記すがごとく「名詩の鑒賞」のレベルにとどまらず、検討すべき問題を多く内包

している。「江南逢李龜年」は宋代以來の杜詩解釋史において、①解釋、②編年、③杜甫の眞作か否か——など、多方面にわたって、多くの議論を引き起こしてきた七絶なのである。もっとも、「江南逢李龜年」の持つ懸案事項については、すでに、松浦友久〔編〕『校注唐詩解釋辭典』杜甫「江南逢李龜年」の項（植木久行〔執筆〕）において、その殆どが整理・説明されている。したがって、本詩の理解には前掲書を参照することが必須であり、その中に主要な議論はほぼ盡されているといつても過言ではない。

しかしながら、筆者は今回、「江南逢李龜年」の唐代における流傳について興味深い事實を發見した。從來の杜詩解釋史においても觸れられていない問題であり、本稿を以てその報告としたい。

## （二）胡仔『苕溪漁隱叢話』の説

前節（一）の、③杜甫の眞作か否か、については、「南宋」胡仔（一一〇八？—一二六八？）『苕溪漁隱叢話前集』<sup>(4)</sup>卷十四が、杜甫の作ではないとの見解を提出しており、管見の限りでは③の問題における最も早期の發言である。

277 苕溪漁隱曰、「（…省略…）『江南逢李龜年』二云、『岐王宅裏尋常見、崔九堂前幾度聞、正是江南好風景、落花時節又逢君。』此詩非子美作、岐王開元十四年薨、崔九亦卒於開元中、是時子美方十五歲、天寶後子美未嘗至江南。（…省略…）」

『苕溪漁隱叢話前集』が「江南逢李龜年」が杜甫の作ではないと主張する根據は以下の「A」「B」の二點である。

「A」詩中の「岐王」、すなわち惠文太子李範は開元十四年（七二六）の没。「崔九」、すなわち崔九（九は排行）も開元年間（正確には十四年<sup>5</sup>）に没している。開元十四年には杜甫（字は子美）はわずか十五歳である（から皇族や貴顯の邸宅に出入りして李龜年の歌唱を耳にしたとは考えられない）こと。

「B」詩中に「江南」とあるが、杜甫は（開元年間、彼が二十歳前後の數年間、吳越の地、すなわち長江下流南部の地域「江南」に遊んだことがあるもの）天寶年間より後には「江南」に至っていないこと。

### (三) 胡仔説への論駁

胡仔の説「A」「B」については、以下のごとく論駁〔a〕

〔b〕が準備されている。

〔a〕聞一多「少陵先生年譜會箋」(開元十三年の條)の説(要約)

少年杜甫が李龜年の歌唱を聴いたのは、首都長安ではなく、東都(東京)洛陽にある岐王李範や崔滌の邸宅であった。杜甫の生地である河南鞏縣は洛陽から近かった。また、彼が幼少期養われた叔母「萬年縣君京兆杜氏」の家は、洛陽の建春門内の仁風里にあった。

さらに、杜甫は「壯遊」の詩で「往昔十四五、出遊翰墨場。斯文崔魏徒、以我似班揚」<sup>(8)</sup>と述べるように、十四五の年には文人の世界で頭角を現し、崔尙・魏啓心といった文人から自分は班固・揚雄に似ていると賞賛されたことを述懐している。つまり、少年期にすでに名士・貴顯と交際し(ていたのだから、岐王李範や崔滌など皇族や貴顯の邸宅に入りして李龜年の歌唱を耳にし)ていたはずである(以上、要約)。

〔b〕清「錢謙益」箋注『錢注杜詩』卷十七の説(要約)

杜甫「江南逢李龜年」の唐代における流傳について(長谷部)

詩中の「江南」は、長江下流南部の地域を指すのではなく、(杜甫が最晩年に至った)潭州を指す(以上、要約)。

このように、「江南逢李龜年」は杜甫の作ではないとする胡仔の説に對しては論駁が可能であり、現在では本詩を杜甫の作と考える方が大勢を占めている。とりわけ、「A」の「杜甫が李龜年の歌唱を耳にしたのは岐王李範と崔滌の洛陽の邸宅である」とする見解は、一九三〇年に聞一多が提出して以來、一九五一年に馮至が『杜甫傳』<sup>(9)</sup>において採用したためもあってか、現在では通説となっている。

しかし、その一方で、「江南逢李龜年」が杜甫の作ではないと主張する論者は、「南宋」胡仔に始まり二十世紀後半に至るまで出現しているのである。

ここで留意すべきは、その最も早期の「南宋」胡仔は、杜詩の編纂や校定、そして注釋が開始された宋代に、この發言を爲したということである。杜集の編纂史を考えると、北宋期に王洙・王琪本『杜工部集』が成立して杜集の基本的なかたちが生まれ、南宋期には、郭知達「編」『杜工部詩集注』、蔡夢弼「會箋」『杜工部草堂詩箋』など、杜甫詩集全書への注釋が出現した。

## 中國文學研究 第二十九期

胡仔は南宋初期の人であるから、まさしく現行の杜集の基礎的なかたちが形成されつつあった時期であった。胡仔は整理されつつあった杜甫の詩文集への強い關心のなかで、自著の詩話『苕溪漁隱叢話前集』にこの説を書き記した、と判断される。

では、なぜ、杜甫の詩文集が整理されつつあった南宋初期という、極めて早い時期に——換言すれば、複数の杜詩學者の檢證を経ることもなく——「江南逢李龜年」が杜甫の作ではないとする説が提出されたのであろうか。次節(四)で検討したい。

## (四) 鄭處誨『明皇雜錄』

〔唐〕鄭處誨(<sup>10</sup>)撰『明皇雜錄』卷下には「江南逢李龜年」をめぐる逸話(エピソード)が收められている(引用文中の「C」「D」および「マ」は引用者が補ったもの)。

18 〔C〕唐開元中、樂工李龜年、彭年、鶴年兄弟三人、皆有才學盛名。彭年善舞、鶴年、龜年能歌、尤妙製渭川、特承顧遇。於東都大起第宅、僭侈之制、踰於公侯。宅在東都通遠里、中堂制度甲於都下。今裴晉公移於定鼎門外

別墅、號綠野堂。<sup>〔D〕</sup>其後龜年流落江南、每遭良辰勝景、常爲人歌數闋、座中間之、莫不掩泣罷酒。則杜甫嘗贈詩所謂、「岐王宅里尋常見、崔九堂前幾度聞。正値江南好風景、落花時節又逢君。」崔九堂、殿中監滌、中書令湜之第也。

『明皇雜錄』の記述は内容的に二段に分けることができる。

## 〔C〕(「唐開元中」から「綠野堂」まで)

開元年間、樂工の李氏三兄弟の才能は盛名を馳せた。李龜年には彭年・鶴年という二人の弟がいた。彭年は舞いに、鶴年は龜年と同じく歌唱に優れていた。龜年は玄宗や皇族・貴顯の寵愛を受け、「東都」洛陽の通遠坊に構えた彼の邸宅は、王侯をしのぐ豪華さであった。

## 〔D〕(「其後」から「中書令湜之第也」まで)

その後(安祿山の亂を経て、江南を漂泊することになった龜年は、佳辰や名勝に臨んでは嘗ての美聲を披露し、それを聞く者で涙を流さぬ者はいなかった。杜甫の詩「江南逢李龜年」はそのことを詠ったものである。詩中の「崔九堂」とは、殿中監の崔滌と中書令の崔湜兄弟の邸宅である。

鄭處誨（？～八六七）は、大和八年（八三四）の進士。『明皇雜錄』は大和から開成（八三六～八四〇）への改元期に彼が祕書省校書郎であった時に撰述されたと推定されている。<sup>14</sup>その後、「唐」范攄『雲溪友議』<sup>15</sup>卷中「雲中命」にも右の「D」部が採られている。

現存の杜甫の詩歌千四百餘篇は、——前節（三）で述べたごとく——宋代になって整理されたものであり、唐代に記録されたものが現在にも傳えられた例は極めて少ない。<sup>16</sup>その意味で、『明皇雜錄』に記録された「江南逢李龜年」は非常に貴重な例である。

しかし、『明皇雜錄』（及び『雲溪友議』）に記録されたからこそ、「江南逢李龜年」は杜甫の作ではないと疑われた、とも言えるのである。

『明皇雜錄』は主に「唐」玄宗一代の雜事を記した筆記史料であり、その多くは「異聞瑣事」に屬する。安祿山の亂を経た約四十年後、洛陽から遙か遠く離れた南方で李龜年と再會したという、「江南逢李龜年」をめぐる逸話は傳奇的要素が濃厚であり、「異聞瑣事」と呼ぶにふさわしい。杜集の整理、そして（年譜の制作・杜詩の編年など）杜甫の傳記研究が本格化した宋代に、この逸話が果たして史實か否か、検討された

杜甫「江南逢李龜年」の唐代における流傳について（長谷部）

のも至極當然のことであろう。

さらに無視できないのが、『明皇雜錄』は杜甫の終焉説話も記しているということである。

40 杜甫後漂寓湘潭間、旅於衡州耒陽縣、頗爲令長所厭。甫投詩於宰、宰遂致牛炙白酒、甫飲過多、一夕而卒。集中猶有贈聶耒陽詩也（『明皇雜錄補遺』）。

杜甫は湖南の耒陽縣で縣令の聶某から贈られた牛肉と白酒の飲食し過ぎて死んだという、いわゆる杜甫飢死説は、この『明皇雜錄』が初出であり、新・舊唐兩書の杜甫傳にも採られる。この飢死説もまた傳奇的要素が濃厚であり、宋代における杜甫の傳記研究ではその眞偽が検討の對象となっている。胡仔「苕溪漁隱叢話前集」卷十四もまたこれに言及する。

280 『學林新編』二云、「（…省略…）近世有小說『麗情集』者、首敘子美因食致牛肉白酒而卒、此無據妄説不足信。（…省略…）」

『苕溪漁隱叢話前集』は、「南宋」王觀國「撰」『學林新編』

をそのまま引用する。『學林新編』は、「北宋」張良房「編」『麗情集』（佚書）が収める杜甫餓死説を根據の無いものとして否定するが、この杜甫餓死説はそもそも「唐」鄭處誨の『明皇雜錄』が初出である。

このように、胡仔は『明皇雜錄』所載の杜甫をめぐる二つの逸話<sup>エピソード</sup>——①杜甫は李龜年と再會して「江南逢李龜年」を作った、②杜甫は牛肉と白酒の飲食し過ぎて死んだ——の史實性をともに否定しているのである。この二つの逸話<sup>エピソード</sup>は、傳奇性が濃厚であるが故に、唐代の筆記史料『明皇雜錄』に記録され、杜集の整理・杜甫の傳記研究が本格化した宋代には、傳奇性が濃厚であるが故に、王觀國および胡仔によってその史實性が否定されることとなったのである。

### （五）『宋本杜工部集』と『明皇雜錄』

本節では、前節（四）の『明皇雜錄』18、とくに「D」部について、問題點「E」「F」を舉げて具體的に検討する。

「E」『明皇雜錄』では、「江南逢李龜年」第三句が「正値江南好風景」となっており、『宋本杜工部集』<sup>17</sup>卷十七など、宋代に整理された杜集（杜甫の詩文集）の多くが「正是江

南好風景」であるのと異なっている。

「F」『明皇雜錄』では、「江南逢李龜年」の引用後に、

崔九堂、殿中監滌、中書令湜之弟也。

という一文が加えられており、『宋本杜工部集』の雙行の夾注、

崔九、即殿中監滌也。中書令湜之弟也。

と表現及び内容が極めてよく似ている。

『宋本杜工部集』は、二種類の杜甫の詩文集（第一本と第二本）をつなぎあわせて一本としたものである。第一本は、後のさまざまな杜集の祖本である王洙・王琪本の系統に屬するテキストであり、第二本は、南宋の吳若本の系統に屬するテキストである。<sup>18</sup>「江南逢李龜年」を収める卷十七は——完本ではなくその缺落部分を清代の影寫で補っている『宋本杜工部集』のなかでも——王洙・王琪本系統（第一本）の宋刻部分に相當するので、現存最古のテキストと位置づけられる。<sup>19</sup>

『宋本杜工部集』と『明皇雜錄』とを對照させながら、まず「E」について考えてみよう。唐代の『明皇雜錄』で「値」に作っているということは、唐代では「江南逢李龜年」は『宋本杜工部集』とは違うテキストが流傳していた（＝傳寫さ

## 『宋本社工部集』（宋：宋刻部分／影：影寫部分）

## 「江南逢李龜年」

第一本「王洙・王琪本」系	影	①
	影	②
	影	③
	影	④
	影	⑤
	影	⑥
	影	⑦
	影	⑧
	影	⑨
宋		⑩
宋		⑪
宋		⑫
影		⑬
影		⑭
	影	⑮
	影	⑯
	宋	⑰

## 卷①

第1―2葉：北京圖書館藏本より補つた部分

第3―5葉：宋刻第一本

第6―24葉：宋刻の王洙本を毛晉が劉臣に影寫させ、それを毛辰が王爲玉に影寫させた部分。

## 〔その他〕

〔i〕 卷⑫の第21葉後半は北京圖書館藏本より補った部分。

〔ii〕 卷⑬の第1―2葉は北京圖書館藏本より補った部分。

〔iii〕 補遺の第7―8葉は北京圖書館藏本より補った部分。

〔iv〕 卷⑬⑭は毛辰が王爲玉に影寫させた部分であるが、第二本に相當する。

第一本	⑮
宋	⑯
宋	⑰
宋	⑱
宋	補遺

杜甫「江南逢李龜年」の唐代における流傳について（長谷部）

れていた」と考えられるのである（『雲溪友議』もまた「値」に作る。〔注〕（15）参照）。

次に「〔F〕について。『宋本社工部集』には多く雙行の夾注を含んでおり、それらが杜甫の自注なのか、後人の附加したものなのか、峻別する必要がある。謝思煒『宋本社工部集』注文考辨<sup>(20)</sup>は、『宋本社工部集』第一本の注文はすべて杜甫の自注と考えられる」旨の見解を提出している。謝思煒論文に従えば、（第一本に相當する）「江南逢李龜年」の雙行の夾注「崔九、即殿中監滌也。中書令湜之弟也」は杜甫の自注ということになる。また、『宋本社工部集』以外の比較的早期の杜集でも、この「崔九、即殿中<sup>(21)</sup>」とはば同一の表現が「公自注」として引用されているので、「崔九、即殿中……」が杜甫の自注である蓋然性は極めて高いと考えられる。そして、「崔九、即殿中……」が杜甫の自注である蓋然性をさらに高めるものとして、『明皇雜錄』の記述がある。

『明皇雜錄』では、

崔九堂、殿中監滌、中書令湜之弟也。

(杜詩の「崔九堂」とは殿中監の崔滌と中書令の崔湜兄弟の邸宅である)

となっている。これは明らかに、鄭處誨が杜甫の自注、

崔九、即殿中監滌也。中書令湜之弟也。

(「崔九」とは殿中監の崔滌のことである。崔滌は中書令である崔湜の弟である)

を言い換えて、自著『明皇雜錄』のなかに取り入れたものと判断される。

『明皇雜錄』は、——前節(四)に示したように——李龜年が「東都」洛陽に大邸宅を立てたことを記す(「於東都大起第宅」)。鄭處誨は、その後の顛末として龜年の流落を記し、さらに杜詩「江南逢李龜年」を引用する。「江南逢李龜年」にはもともと「崔九、即殿中……」なる自注が附されていたため、「江南逢李龜年」を引用する際、鄭處誨はそれを省くことなく、しかも前半部の文脈と合致するように「中書令湜之弟」を「中書令湜之弟」と言い換えたと考えられるのである。

前節(四)で述べたように、杜詩のなかで唐代に記録され

たものが現在にも伝えられた例は極めて少ない。その中で、「江南逢李龜年」は作られた約七十年後に『明皇雜錄』に記録されている。つまり、本詩は、杜詩の収集・整理が盛んに行われた宋代になって始めて発見されたのではなく、杜甫没後のわずか七十年後の中唐末期には、杜甫の作として流傳し(「傳寫され」)ており、しかも、その際には「崔九、即殿中監滌也。中書令湜之弟也」なる杜甫の自注が附されていた、と推測される。この推測の根據となるのが、『明皇雜錄』の最後の一文「崔九堂、殿中監滌、中書令湜之弟也」である。

『宋本杜工部集』の雙行の夾注「崔九、即殿中……」は、杜甫の自注として没後わずか七十年後の中唐末期には詩本文とともに流傳していたのであり、後人の附加したものではないと判断されるのである。

## (六) 小結

『明皇雜錄』所載の二つの逸話——①杜甫は李龜年と再會して「江南逢李龜年」を作った。②杜甫は牛肉と白酒の飲食し過ぎて死んだ——は、「南宋」胡仔によってその史實性が否定された。

ところが、現在、前者①については史實として認める方が



大勢を占めている。その一方で、後者②はやはり事實ではなく傳説に過ぎないとされる。<sup>(24)</sup>

②については、この傳説が生まれたものとなった杜甫の五言古詩「聶耒陽、以僕阻水、書致酒肉、療飢荒江、詩得代懷、興盡本韻。至縣呈聶令。陸路去方田驛四十里、舟行一日、時屬江漲泊於方田」(『杜工部集』卷八所收)の詩題及び本文を検討し、杜甫が牛肉と白酒の飲食し過ぎて死んだことを證明するものが無いとの結論が出されている。<sup>(25)</sup>

①は②の逆である。一度、「南宋」胡仔によって「江南逢李龜年」は杜甫の作ではない、とされながらも、宋代以來の杜詩解釋史のなかでは杜甫の作として認める方が大勢を占めている。それは——第(三)説で述べた聞一多のそれに代表される——精緻な考證の結果である。

今回、本稿では歴代の杜詩解釋の蓄積を踏まえた上で、新たに、『宋本杜工部集』の雙行の夾注に注目することによって、「江南逢李龜年」の唐代における流傳のありかたを明らかにした。杜詩に限らず中國古典詩歌を解釋する際、雙行の夾注に注目することは——それが作者の自注なのか峻別することも含めて——極めて重要な作業である。<sup>(26)</sup>『宋本杜工部集』の雙行の夾(『注文』)には、「江南逢李龜年」以外にも探究

杜甫「江南逢李龜年」の唐代における流傳について(長谷部)

すべき價值を持つものが少なくない。それらの探究は今後の課題としたい。

# 〔注〕

(1) 『錢注杜詩』(上海古籍出版社、一九七九年十月)。

(2) 四川省文史研究館『編』『杜甫年譜』(四川人民出版社、一九五八年十二月)。

(3) 大修館書店、一九八八年十一月。

(4) 吳文治『主編』『宋詩話全編』四「胡仔詩話」(蔡雲祥・田志剛『校點』)三六七頁、江蘇古籍出版社、一九九八年十二月。

(5) 『舊唐書』卷七十四「崔仁師傳附崔滌傳」參照。

(6) 聞一多『唐詩雜論』(傅璇琮『導讀』、蓬萊閣叢書、上海古籍出版社、一九九八年十二月。初出：一九三〇年)所收。聞一多「少陵先生年譜會箋」が、岐王李範や崔滌の邸宅が洛陽にあると判斷した根據は以下の通り。

「1」『清』徐松『唐兩京城坊攷』卷五「東京・尙善坊」には岐王李範の邸宅が洛陽の尙善坊にあったことが記録されていること。

「2」張說「榮陽夫人鄭氏墓誌」に「終于雒陽之遵化里」とあり、鄭氏は崔滌と彼の兄崔湜の母であることから、崔滌の邸宅もまた洛陽にあったと考えられるこ

## 中國文學研究 第二十九期

と『唐兩京城坊攷』卷五「東京・道化坊」参照。「道化坊」は「遵化坊」とも言う。

なお、聞一多「少陵先生年譜會箋」については、さらに松原朗「聞一多「少陵先生年譜會箋」——詩人から學人へ——」『日本聞一多學會報 神話と詩』創刊號、二〇〇二年十二月）を参照されたい。

- (7) 杜甫「唐故萬年縣君京兆杜氏墓誌」(『錢注杜詩』卷二十所收) 参照。

なお、「唐故萬年縣君京兆杜氏墓誌」については、さらに佐藤浩一「杜甫における『義姑』京兆杜氏——「萬年縣君京兆杜氏」に即して」(『中國文學研究』第二十六期所收、二〇〇年十二月)を参照されたい。同論文は『杜甫研究學刊』二〇〇二年第四期(總第七十四期)に中國語版が掲載されている。

- (8) 『錢注杜詩』卷七所收。

- (9) 錢謙益『錢注杜詩』が「江南」の語で潭州を指すと主張する根據は以下の通り。

「[1]『史記』卷六「秦始皇本紀」に「二十五年、(…省略…)王剪遂定荊江南、(…省略…)」とあり、ここでは「江南」が洞庭湖南の湘水一帯を指している。

『錢注杜詩』は「[1]以外にも、[2]『史記』「項羽本紀」に「徙義帝于江南」とあること、また[3]『楚辭章句』に「婁王遷都屈原于江南、在江湘之間」とあることを指摘する。し

かし、現行の『史記』「楚辭」に、『錢注杜詩』所引の「[2]・[3]」の一文と一致するものを見いだすことはできない。錢謙益の引用の誤りであろうか。

- (10) 「江南逢李龜年」が杜甫の作ではないと主張する論者は、二十世紀後半にも出現している。

「[1]李汝倫『江南逢李龜年』非杜詩辨」、「杜詩論稿」所收、廣東人民出版社、一九八三年十月。

「[2]吳企明「杜甫詩辨偽札記」三「江南逢李龜年」、「唐音質疑錄」所收、上海古籍出版社、一九八五年二月。

- (11) 日本語譯『杜甫——詩と生涯』(橋川時雄「譯」、筑摩書房、一九五五年三月)。

- (12) 宋代の杜集の編纂史については以下の論考が参考になる。

「[1]許總「宋代杜詩輯注源流述略」、「杜詩學發微」所收、南京出版社、一九八九年五月。

なお、『杜詩學發微』の日本語譯に、加藤國安譯「譯注『杜甫論の新構想——受容史の視座から』(研文出版、一九九六年十月)がある。

「[2]吉川幸次郎「譯」『杜甫Ⅱ「あとがき」(世界古典文學全集二十九、筑摩書房、一九七二年)

- (13) 田廷柱「點校」『明皇雜錄 東觀奏記』、唐宋史料筆記叢刊、中華書局、一九九四年九月。同書は守山閣叢書本を底本とする。

- (14) 「注」(13)所掲書の「點校說明」参照。

(15)

明皇幸岷山、百官皆竄辱、積屍滿中原、士族隨車駕也。伶官、張野狐、雷海清琵琶、李龜年唱歌、公孫大娘舞劍。初、上自擊羯鼓、而不好彈琴、言其不俊也。又寧王吹簫、薛王彈琵琶、皆至精妙、共爲樂焉。唯李龜年奔迫江潭、杜甫以詩贈之曰、「岐王宅裏尋常見、崔九堂前幾度聞。正值江南好風景、落花時節又逢君。」龜年曾於湘中採訪使筵上唱、「紅豆生南國、秋來發幾枝。贈君多綵繡、此物最相思。」(以下省略。傍線は引用者。引用文は中國文學參考資料小叢書本に據る。古典文學出版社、一九五七年四月)

『雲溪友議』の著者、范攄は生没年不詳。乾符年間(八七四〜八九七)に在世していたことから、鄭處誨(？〜八六七)より後の人であり、『雲溪友議』の成書時期も『明皇雜錄』より後と判断される。

\* 周祖謨『主編』『中國文學家大辭典 唐五代卷』「范攄」の項(陳尚君「執筆」)参照、中華書局、一九九二年九月。

[注](10)所掲の吳企明「杜甫詩辨偽札記」は、『明皇雜錄』が『雲溪友議』から「江南逢李龜年」をめぐる逸話を採った旨述べているが、これは誤り。

(16) 陳尚君「杜甫詩早期流傳考」(『唐代文學叢考』、中國社會科學出版社、一九九七年十月) 参照。

(17) 『宋本杜工部集』とは、上海圖書館藏本『杜工部集』を續古逸叢書第四十七種として影印したもの(縮刷本が一九九四年に江蘇廣陵古籍刻印社より出版されている)。

杜甫「江南逢李龜年」の唐代における流傳について(長谷部)

(18)

長谷部剛「宋本杜工部集」をめぐる諸問題——附、『錢注杜詩』と吳若本について——(『中國詩文論叢』第十六集、一九九七年十月) 参照。

(19)

「別表」参照。

(20)

『唐宋詩學論集』所收、新清華文叢、商務印書館、二〇〇三年三月。初出：一九八五年。

(21)

「1」『王狀元集百家注編年杜陵詩史』卷三十一：洙曰、公自注云、即殿中監滌、中書令湜之弟。

『王狀元集百家注編年杜陵詩史』の原刻は、『南宋』隆興・淳熙(一一三六〜一一八九)の間と考えられる。影民國二年(一九一三)貴池劉氏玉海堂影宋刊本。

「杜詩又叢刊」所收)

「2」『分門集註杜工部詩』卷十六

：洙曰、公自注云、即殿中監滌、中書令湜之弟。

『分門集註杜工部詩』は撰者・編者・刻者ともに不明。『南宋』寧宗期(一一九五〜一二二四)の刊刻と推定される。『四部叢刊正編』所收)

(22)

蛇足ではあるが、鄭處誨は「江南逢李龜年」に附された注文を極力活かそうと考えたのであろう、その結果、『明皇雜錄』の最後の一文「崔九堂、……」はいささか文意が亂れたものとなっている。「殿中監(の崔)滌」は弟、「中書令(の崔)湜」は兄であるから、本来は「中書令湜」こそ「殿中監滌」の前に置くべきである。しかも、この文の主語「崔

## 中國文學研究 第二十九期

九堂（崔滌のお座敷）」と、述語後半部「中書令湜之第（中書令の崔湜の邸宅）」とは呼應關係にない。

(23) 「注」(1) 所掲の「清」錢謙益『箋注』『杜工部集』（通稱『錢注杜詩』）は、南宋の吳若本の全貌を知ることができる貴重なテキストである。『錢注杜詩』は「崔九」に注して、下記のごとく言う（傍線は引用者）。

吳若本注云、崔九、即殿中監滌也。中書令湜之弟也。

『舊書』、湜弟滌、素與玄宗款密、用爲祕書監、出入禁中、與諸王侍宴、不讓席而坐、或在寧王之上、後賜名澄、開元十四年卒。

これは、吳若本に「崔九、即殿中監滌也。中書令湜之弟也」なる雙行の夾注があることについて、錢謙益が「杜甫の自注ではなく後人の注が吳若本に取り入れられたもの」と判斷した結果である。

吳若本と杜甫の自注との關係については、「注」(18) 所掲の長谷部論文を、また、この錢謙益の判斷が多く誤りを含むことについては、「注」(20) 所掲の謝思煒論文を参照されたい。

また、黒川洋一「編」『杜甫詩選』（岩波文庫、一九九一年二月）三七四頁に以下のようにある。

杜甫の自注とされるものに崔滌をいうとあるが、崔滌も杜甫が十五歳のときに亡くなっているのので信じがたい。おそらくは後人の付加したものと思われる。この崔九は

別人を指すと考えるべきであろう。

この黒川説（崔九は崔滌ではない。「崔九、即殿中監滌也。」は杜甫の自注ではない）は、本稿の主旨によれば誤りということになる。

(24) 杜甫は大曆五年（七七〇）冬、潭州から岳陽に向かう舟のなかで病死した、とするのが通説となっている。傅璇琮「主編」・陶敏「ほか著」『唐五代文學編年史』中唐卷「七七〇 唐代宗大曆五年 庚戌」の條を参照（遼海出版社、一九九八年十二月）。

また、杜甫餓死説の發生とその展開については、松浦友久『李白傳記論——客寓の詩想——』三九八—四〇五頁「杜甫・李賀における終焉説話」を参照（研文出版、一九九四年九月）。蕭滌非「論杜甫不餓死於耒陽」、『杜甫研究（修訂本）』所收、一九八〇年十二月。

(26) 例えば、宋本李白集に見られる雙行の夾注について論じたものとして、松浦友久「宋本『李太白文集』の題下注について——王琦本との關連を中心に——」（『中國文學研究』第二十一期、早稻田大學中國文學會、一九九五年十二月）がある。